

# 土佐湾ホエールウォッキング育成事業（要旨）

石井 功・中島敏男

平成8年度の調査結果は「1996年度土佐湾ホエールウォッキング育成事業調査報告書」で報告したので要旨とする。

## 1 平成6、7年度調査

過去2年間の調査で1)ニタリクジラが同海域に周年分布すること、2)本海域の個体群は黒潮の主流域を挟んで沖合とは地理的に分離されており東支那海系群に属している可能性が高いこと、3)来遊盛期は春（5～6月）であり、盛期における推定来遊頭数は53頭（CV=0.58）であることを明らかにしてきた。

## 2 平成8年度調査

3ヶ年計画の最終年度にあたる8年度は、過去2年間の調査結果を踏まえて、以下の年次目標を立てて調査を実施した。

- 1)季節分布、来遊状況に関するデータのさらなる集積
- 2)海洋物理環境の把握
- 3)個体識別調査の強化
- 4)分布状況の直接把握
- 5)系群構造の解明

## 3 季節分布、来遊状況

季節分布、来遊状況については、土佐湾西部海域ではほぼ周年ニタリクジラが分布していた。特に春（5月）から秋（11月）にかけて多く分布していたと推察された。分布の季節変化を見ると沿岸沿いに来遊し、春から夏にかけて徐々に沖合に広がった。本年度の特徴はアンケート調査で発見率のピークが9月（過去2年は8月）にあり、目視調査で多くの発見が11月下旬になされたことである。来遊盛期（春季）以降もニタリクジラが長く滞在することが示唆された。

## 4 親子連れの出現状況

親子連れの出現状況は4月に発見群数、頻度ともに多く、次に9月の発見群数が多かった。4月の発見報告は親鯨がTB-01、仔鯨が愛称「フック」（背鰭が特徴的に曲がっていることに由来する）と個体識別された親子が報告の半数を占めた。このような重複発見もかなり含まれているので報告数の多寡が親子連れの来遊量を示しているといえないと、夏は発見群数、頻度とも多くなることから、この頃がピークと考えられる。

## 5 摂餌行動

摂餌行動情報については、11月の目視調査でニタリクジラの発見数が多く、発見された10群17頭がほとんど摂餌行動を示していた。標本船調査では4月から9月に摂餌行動が観察され、最も多く観察された月は9月であった。調査海域では夏以降、ヨコワ（クロマグロ幼魚）漁が非常に盛んにおこなわれ、ヨコワは主にカタクチイワシを捕食していることが漁業者からの報告等で明らかとなっている。この同じイワシの群に対してニタリクジラが摂餌行動をとることが観察されている。ニタリクジラ分布の季節変動は餌生物の影響を強く受けていると考えられる。

## 6 船に対する鯨の行動

船に対する鯨の行動は標本船日誌の分析によった。親子連れ群が有意に高い値（72%）で船に近寄ってきた。摂餌の有無では摂餌群が有意に高い値（82%）で船に近寄ってきた。この傾向は前年度も同様であった。

## 7 海洋物理環境調査

海洋物理環境については、水温、塩分、珪藻プランクトン、動物プランクトンの季節分布と鯨類

分布との間に直接的な関連を見出すことはできなかったが、土佐湾南西部における海洋物理環境や低次生産が季節変動とともに黒潮の位置によって大きく影響を受けることが把握された。

## 8 個体識別調査

既に識別されていたニタリクジラ14個体（土佐湾ホエールウォッティング推進協議会、1995）のうち9個体を再確認するとともに、95年以降に新たに識別された18個体のうち13個体（新個体の可能性の高いものを含めると17個体）を確認した。個体識別調査は、まず、背鰭の形や傷による自然標識が長年の識別に耐えることを証明した。

## 9 分布状況の直接把握

分布状況の直接把握については、地元ホエールウォッティング船25隻、県防災ヘリコプター「りょうま」、調査船土佐海洋丸を用いて全域を一斉に同時探索した。ニタリクジラは調査海域の内と外を短時間にかなり頻繁に行き来すると推察された。

## 10 系群構造

系群構造解明については、1個体から剥離表皮と糞の採集に成功しmtDNA等の分析から高知県沖のニタリクジラは亜種のレベルで北西太平洋のニタリクジラと異なっていることが示唆された。